九州の最奥端「熊本 五家荘」

九州の最奥端「熊本 五家荘」の歴史

五家荘へ足を一歩踏み入れた瞬間に平家の息を感じる。澄んだ空気、流れる風、
聞こえてくるはずのない自然の音、ここにしかない深い異次元の感覚は人の五感全てに伝わってくる。
ある意味、五家荘全体がパワースポットなのかも知れない。
都会では感じることができない深い歴史の歩みは現在もここに残されている。

平家の里伝説

五家荘は全国に知られる平家落人伝説の隠れ里。道路が通った現在でも高い山が重なり合い、えぐり取られたような峡谷は外部からの侵入者を容易に寄せ付けない迫力がある。伝説によると、延長元(九二三)年に藤原一族の追討を逃れた菅原道真の息子、菅宰相と菅次郎兄弟が左座姓に改名して移り住み、その後、壇ノ浦の戦いで敗れた平清盛の孫、平清経が緒方と名乗り、文治五(一一八九)年に住み着いたのが始まりとされる。共に追われる身で、落人となり過酷な運命と戦いながらお家再興と言う希望のために生き延びて来たのである。五家荘は仁田尾、樅木、椎原、久連子、葉木と落人たちが暮らした五つの地区を総称して呼ばれているのだ。

実は五箇という名の平家村が全国数十か所に存在する。島根県隠岐郡五箇村(現・隠岐の島町)や京都府京丹後市峰山町・五箇荘(現・峰山町五箇)などいずれも落人が流れ住み慣習も類似点が多いという。全国に分散する五箇という地名。それはどんな目的があったのだろうか。「秘境五家荘の伝説」(山本文蔵著)によれば、五箇が合言葉だったのではと推測する。つまり、各居住地を合言葉として五箇と名付けておれば、たとえ方々に散らばっても、たとえ子や孫の時代になっても、連絡を取り合うことができるし、氏素性を確認し合うことが出来る。五箇に平家の存亡を賭けたのである。

規模的に平家村は五家荘が一番大きいが、居住地はどこも深山幽谷のような場所が選ばれている。そこに住むための一定のルールも作っている。まず、人目につかないように少人数で行動すること。人跡未踏の地を見つけたら自給自足をする。かまどの煙も霧が発生した時だけ出す。外敵に備え夜に行動するなど徹底したものだった。こうした厳しい日々の条件も、五箇と言う合言葉もすべて平家再来をと願う気持ちが集約されていたのだ。何百年もの間、世の人に知れず孤立経済で暮らしを立ててきた落人たちの誇りと覚悟が伝説となって語り継がれている。

五家荘 平家の里

平家落人にまつわる伝説と当時の暮らしぶりを伝える資料館や、朱色に染まる能舞台、藁葺き民家など、平家の盛衰を身近に感じることが出来る施設。能舞台では平家琵琶や神楽等の郷土芸能が披露される。

久連子古代踊り

娯楽のない山里の生活で、落人たちが都に思いをはせて舞い始めた踊り。久連子鶏(くれこどり)の黒い尾羽飾りの冠笠をかぶり、狩衣、袴姿の男衆が大太鼓、小太鼓、鐘をたたきながら舞う姿はどこか物悲しい。「国選択の無形民俗文化財」

左座家

平安時代、菅原道真の嫡男は政敵である藤原一族の追討をさけるため左座太郎と改名し、五家荘仁田尾の地に落ち延びた。その後も代々仁田尾を支配し、屋敷内には古文書などが展示されている。

鬼山御前

屋島の戦いの時に船のほ先に日の丸の扇を高く掲げ、「この扇を射て見よ」と源氏方に指し示した官女の話は有名。玉虫御前というその官女は鬼山と名を改めこの地に居住。扇を射った那須与市の息子と運命的な出会いがあり、恋に落ちたという物語は伝説に。

九州の最奥端「熊本 五家荘」の峰

五家荘を何百年も守り続けた山々。五家荘を囲むこの地形は
平家が落ちて流れ着くように招き入れたのではないか。
そして源氏の追討を拒むように人と自然の調和を保ってきたのだろうか。

九州山地の中央部に国見岳や京丈山など標高千七百メートル級の尾根が連なる。中でも白鳥山は平家追討から逃れた平清経一族が開墾し住みついた場所でもある。五家荘は天にそびゆる高峰、白雲かかる俊嶺、山腹は鹿も通れぬほどの断崖絶壁と古文書に表現されたほどの秘境で、平家落人が流れたどり着いたのもこの地形ならではの特徴といえるのではないだろうか。

またこの地には良好な天然の水が湧く。それを貯えた池は長い時の流れに埋もれてしまったが、一帯は清流川辺川や耳川の源流域に位置し分水嶺をなしている。古来、ここは月の輪熊が住む「熊山」と呼ばれ、到底人間が住める環境ではないと思われていた。そのうえ五家荘の奥地は水の便が悪く、谷底まで樽を担いで水を運ばなければならないほどの厳しい地形で、日々の苦労を表すかのような「樽水」という地名が残されている。ここには多くの伝説があり、村の人々が郷土の宝として大切に守り伝えてきた。「周蔵七へんめぐり」という逸話がある。周蔵が山に山菜を取りに行った帰り道のこと、御池のそばを通り村へ帰るはずなのに池の周りを何度もぐるぐる回るだけでとんと家路へと帰れない。八度目にやっとわが家にたどり着いた。この付近を通る際は「朝日に向かい、夕日を背にして戻れ」という言葉が生まれているほど、この周辺の山は深く険しく、土地の人でさえ道に迷ってしまうというのだ。自然環境が織りなす不思議な現象など深い山郷の神秘的な世界を感じずにはいられない。

九州の最奥端「熊本 五家荘」の自然

森には薬草やさまざまな植物が生い茂っている。
森林浴に浸り深呼吸をすると身体が浄化された気分になる。
平家の落人もこの森を抜けて五家荘に辿り着いたのだろうか。

「国見岳」

五家荘と宮崎県椎葉村の境にまたがる九州山地の盟主。ヒメシャラ、ウチワカエデ、カツラ…、深い緑に包まれたどっしりとした奥深い山は、九州中央山地の最高峰というだけあり、山頂からの眺望は360度の雄大なスケール。低木に囲まれた頂上には祠が安置されている。

「白鳥山」

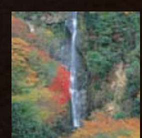
「壇ノ浦の合戦の後、捕らえた盗賊の案内で平清盛の孫・清経が、家臣らと共に落ち延びた」という伝説のある秘境の山。ブナ、モミ、ハリギリ等の巨木を始め、九州では見ることの少ないイチイの巨木を見ることができる。数百年という歳月を生き続ける巨木は、平家の落人たちを見守ってきたのだろう。

「京丈山」

九州の脊梁をなす九州中央山地の北部に位置する京丈山。5月上旬のカタクリから初夏のヤマシャクヤク、秋の紅葉と、今なお手付かずの自然美が残る山。山頂の右手には、山の神の石が祀られている。清浄な空気漂う、森林の霊験あらたかなる雰囲気を体感することができる。

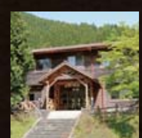
せんだん轟の滝

日本の滝百選のひとつ、落差70ｍの名瀑。滝壺の手前まで遊歩道が続き、轟音を立てながら一気に下る迫力ある姿を間近で見ることができる。



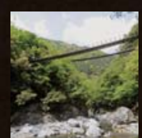
五家荘自然塾

廃校になった小学校の跡地に建てられた宿泊研修施設。40人まで宿泊でき、炭焼き窯、木工室、キャンプファイヤーなどの施設がある。



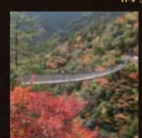
樅木の吊橋

以前はかずら橋だったが、今では地元の杉や栗の木を使った親子橋。上段は「あやとり橋」下段は「しゃくなげ橋」と呼ばれる。



梅の木轟公園吊橋

長い間、幻の滝とされていた「梅の木轟の滝」へ渡るために建設された五家荘最長の吊橋。橋から見る四季折々の壮大な渓谷美は絶景だ。



九州の最奥端「熊本 五家荘」の人

五家荘を訪れるとあたたかく迎えてくれる地元の人達。
気軽に言葉をかけて五家荘の深いおもてなしを感じてください。

五家荘地域振興会 会長 黒木 計さん

自然美と伝説に彩られた感動の山歩き

私がお勧めなのは「白鳥山」です。平家一族も隠れ住んだ山で、四季折々の木々や花々はもちろん、自然林と石灰岩のドリーネが素晴らしいです。ドリーネとは、水で溶けた石灰岩の窪みのことをいいます。石灰岩が苔で覆われた様子は、寺院の日本庭園を思わせる落ち着いた雰囲気です。そこだけ時間が止まったようで、聖域を感じさせる神秘的な空間が広がっています。私はここに来る度、神聖な気持ちになれ、癒されるんです。

民宿の女将 緒方さよ子さん

素朴な山里料理で心のこもったおもてなし

宿では、山で採ってきた山菜やシカ、イノシシ、ヤマメなど山里ならではの料理をお出ししています。中でも一番こだわっているのはシシ鍋です。うちでは、山で獲れたイノシシを使います。五家荘のイノシシは、夏の暑さや冬の厳しい寒さの気候条件に加え、起伏に富んだ山を駆け、どんぐりやクルミ、ブナの実を食べて育っているので甘みがあり、肉質がとても柔らかなんです。トロトロの脂身ですが、後味が全くしつこくなく、味噌とイノシシのダシだけで、とても美味しいスープに仕上がるんですよ。

緒方家の語り部 坂田満徳さん

秘境の地の歴史のひとつ「緒方家」を語る

緒方家の隣で生まれ育ち、今は施設の歴史や謂われをお話ししています。この緒方家の天井には吊階段が隠され、その上には源氏の追っ手が来た時に逃れる為の隠し部屋があり、そこでは秘密の会議を行っていたとも言われています。また討ち取った人の首を祀る棚もあり、東(今で言う椎原方面)から来た者は農民であれ全て警戒せよと、源氏からの追討に注意していたようです。外敵を防ぎ五家荘を守り抜くため、人目を忍び隠れ住んだ平家落人の暮らしぶりを身近に感じることができますよ。

K U M A M O T O G O K A N O S H O

岩奥の冬景色

五家荘への玄関口「岩奥」
鬼山御前はこの地へ逃げ隠れたのち
その奥にある保口で
那須与市の息子・小太郎と
恋に落ちたと伝えられる

2011年3月12日
九州新幹線(鹿児島ルート)全線開業

ACCESS MAP

[お車]
福岡方面 ›››› 松橋IC ··· R218→R445 ··· 五家荘 約60分
鹿児島方面 ››› 人吉IC ··· R445 ··· 五家荘 約60分

[JR] (九州新幹線全線開業後)
新大阪 ››› 最短約3時間20分 ››› 新八代 ›› R443経由 車で約120分 ›› 五家荘

●お問い合わせ(ガイドのお申し込み)
八代市泉支所 総務振興課
TEL 0965-67-2111
〒869-4401 熊本県八代市泉町柿迫3131番地
http://www.city.yatsushiro.kumamoto.jp/ 八代市 検索